



2022年

みやま

第288号

病院理念
『患者さまの不安をとること』
当院の基本方針
「地域に根ざした安心できる医療」
「精神科医療の充実」
「老人医療」医療と福祉の結合

医療法人社団光生会 平川病院

〔ホームページ〕 <http://www.hirakawa.or.jp/>

平川病院の副院長就任のご挨拶

副院長 宮田 久嗣

こんにちは。このたび、平川病院の副院長（精神科）に就任いたしました宮田です。私は、東京慈恵会医科大学を昭和58年（1983年）に卒業しましたが、その年から週に1日、非常勤医師として平川病院にお世話になっていました。大学のクラブ（柔道部）の1年先輩が院長先生の平川淳一先生ですので、その時代も含めると平川先生には都合45年間ほどお世話になっております。

私の専門は、アルコール依存やギャンブル嗜癖などのアディクション（依存や嗜癖）や、精神科の薬の作用の研究です。でも、患者さんの診療も大好きです。慈恵医大で私が精神科の病棟医長をしていました25年ほど前、当時の教授の専門の関係で、病棟は手首を切る女の子や、多重人格の若者たちであふれかえっていました。そのときに、初めて、多重人格の患者さんが入院すると、他の患者さんに伝染するということを体験しました。精神医学用語でいうと、多重人格といふいわば最強の防衛機制（自分に起きたつらい体験を、別人格に分担させる心の機構）を、ボーダーライン傾向やヒステリー傾向のある患者さんがとりこんだということです。ただ、最近は、このようなタイプの患者さんはほとんど見なくなりました。かわって、発達障害の患者さんの全盛期です。精神科の患者さんは、世相を映す鏡と言われます。発達障害の患者さんの増加は、煩雑な人間関係を避けられるAI時代の精神科の病気の在り方なのかもしれません。

患者さんから学ぶことは生涯続きそうです。ぜひ、平川病院の皆様と一緒に学んでいければと思っています。何卒宜しくお願ひいたします。



【表紙】副院長就任あいさつ 【P 2】地域生活支援室より 【P 3】歯科から 【P 4】アルコールデイケアメンバーの年齢別・通所日数にみる利用目的の変化 【P 5】認知症疾患医療センターの動き 【P 6】認知症研修会の講師をしました 【P 7】令和4年度 新入職者オリエンテーション 【P 8】薰風会 山田病院様ご来院

【ディケア 発達障害専門プログラム家族会】

地域生活支援室より

ディケア 科長 公認心理師 井出 学

ディケアで大人の自閉症スペクトラム障害専門のプログラムが開始されて4年近く経ちました。発達障害の早期発見早期介入という考え方が普及してきましたが、専門プログラム参加メンバーの場合、大人になるまで診断を受けなかったことや障害が軽度であったことで、適切な支援を受けて来なかった方が殆どです。その場合、支え手になっていたのは家族です。幼少期から進学、学校生活、就職といった成長過程で常に育てにくさを感じ、他の子ども達と比較し、親に問題があるのではという自責の念に苛まれながら奮闘してきたご家族が大半です。こうしたご家族の不安を解消し、専門的な知見から協力したいという思いで家族会を開催しています。

家族会には①相互支援②学習③社会的活動の3つの役割(※)があると指摘されています。当院ディケアの家族会はメンバーの変化に焦点を当てて家族とディケアスタッフで一定期間(現在は1ヶ月ごと)を振り返る形で進行します。その中でこれまで苦悩してきたことや、子どもの将来に対する不安、自身や配偶者を責める気持ちが語られます。子どもへの見方が否定的な側面に傾き、障害特性として理解するのではなく性格や人柄を叱咤してきたこと等が家族同士で共有・共感されます。スタッフからは労いと共に、障害特性に関する心理教育、子どもの立場も親の立場も尊重できる

アサーションやポジティブな側面に気付くためのリフレーミングの練習、発達障害のある成人が利用できる社会資源等の情報提供を行います。そのプロセスを繰り返すことで家族の不安が小さくなっていき、具体的な将来への筋道が見えてくることがあります。

家族会でしばしば発言されることに「親が自分の人生を楽しもう」という言葉があります。もう少し子どもを信じて、支援者を頼って、これまでの荷を下ろしたほうがうまくいくという実感があるようです。ひきこもりや8050問題に発達障害の問題が影響しているケースが少なくないことが指摘されています。大人の発達障害に対する適切な支援介入と同時にご家族へのエンパワーメントの機会の必要性が一層高まっていることを感じます。



※参考：公益社団法人全国精神保健福祉社会連合会ホームページ <https://seishinhoken.jp/>

様々な視点からの診療アプローチ

歯科から

歯科医師 酒井 真悠

4月より勤務することとなりました、日本大学歯学部摂食機能療法学講座の酒井真悠と申します。平川病院以外では主に大学病院で摂食・嚥下の診療、また訪問診療も行っています。

最近では誤嚥性肺炎という言葉を皆さんによく聞くようになったのではないでしょうか。テレビなどでも取り上げられる機会が増え、様々な患者さんからご相談が増えています。患者さんたちは食べる、飲むに少しでも異常が出ると不安になります。それは日常の1つである食事に大きく関わるからです。また、当たり前にできていたことができなくなってしまう、大きな病気に繋がってしまうという気持ちに皆さんなります。さらには食事という日常の楽しみの1つが奪われてしまう可能性があるからです。摂食・嚥下機能障害の治療は手術や薬で治すという方法ではなく、今の口や喉の機能の状態を把握し、その状態に合う食事の形態や治療方法を指導、提案することが主になります。また、現在の機能の維持や向上のためにリハビリも行っています。

食べる、飲むことは口や喉だけで行っているように見えますが、全身の状態が良いことも必要になってきます。そのためには私たち歯科医師だけでなく、医師や看護師、言語聴覚士、作業療法士、理学療法士、歯科衛生士



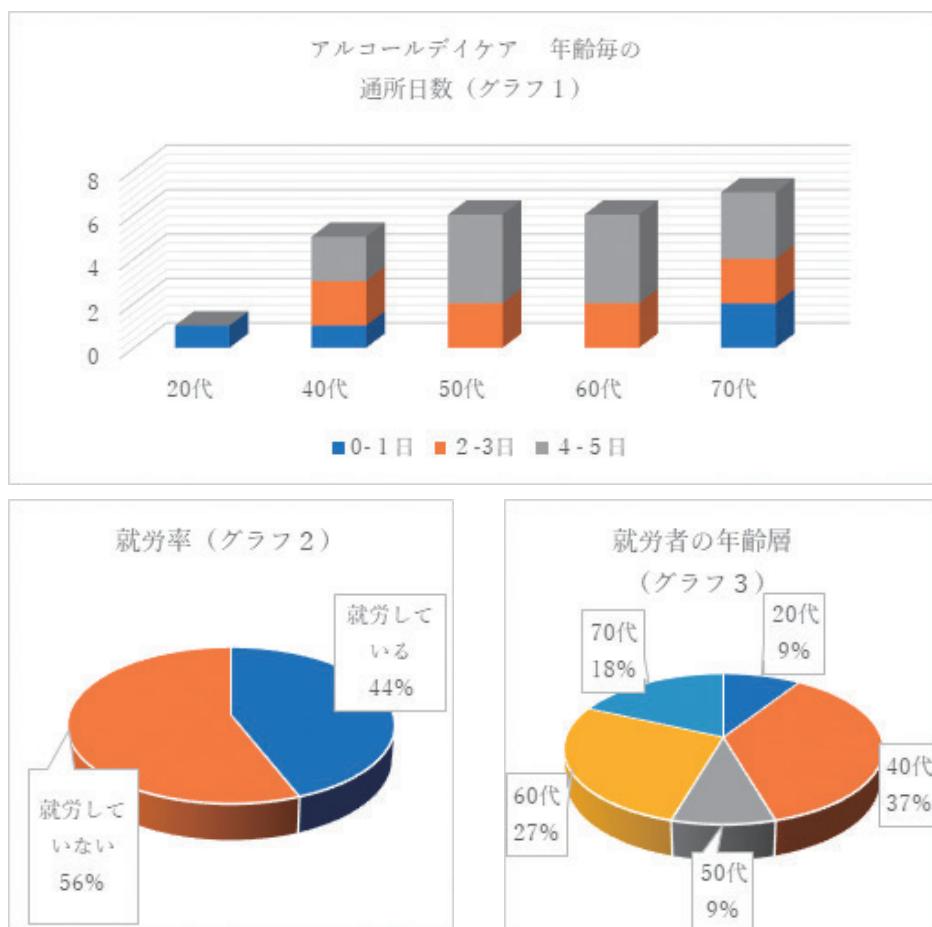
などの様々な職業から視点が必要となり、情報を共有して患者さんを導いていくことになります。私が大学で所属する教授は『飲み込みだけでなく、患者さんの全身状態や様子を見て診断してください』と日々の診療で指導しています。全身状態を見て判断するには自分だけでなく、様々な人たちの視点、情報が重要になってくると感じています。

平川病院には様々な疾患の患者さんがいらっしゃいます。患者さんの状態に目や耳を傾け、平川病院のスタッフさんたちと協力してより良い診療を目指していきたいと思います。今後とも宜しくお願ひ致します。

アルコールデイケアメンバーの年齢別・通所日数にみる利用目的の変化

医療の質向上促進委員会
デイケア 主任 山下 美香

令和3年10月号のみやま記事にて、当院の精神科デイケアメンバーの年齢別・通所日数にみる利用目的の変化について、報告しました。今回は同じテーマで、アルコールデイケアメンバーの分析をしたので、報告します。



グラフ1からアルコールデイケアは、20代～70代までの方が通所しており、特に50代以降の方は、通所日数が多く、日中の活動場所として定期的に通われていることが分かります。飲酒しない時間を確保するため、生活リズムや健康状態を維持するため、デイケアを利用する方が多い年代にあたります。一方、20代・40代では、就労している方が多く、仕事の休日や仕事後に参加することで、治療に取り組んでいる方が目立ちます。仕事とデイケアの両立をすることで、生活リズムを崩さず、また社会で働いていると忘れがちである、依存症であることを振り返る時間を設けています。就労率をみると、3割強の方が仕事に就いており、年齢層のグラフからは、最も多いのが40代、次いで、60代以降が多いことがわかります。定年退職後の高齢の方々も、社会とのつながりを持続することで、規則正しい生活を意識しているようです。アルコールデイケアは、断酒のための利用と同時に個別の目標に合わせた支援を行っています。個々の生活スタイルに合わせて柔軟に対応できる運営を目指し、一人でも多くの方が断酒を継続し、回復していくよう、取り組みたいと思っています。

認知症の方と家族介護者の支援 ～ハ王子市の「家族会」について～



認知症の方の支援には、認知症のご本人とともにご家族の方への支援も大切です。ご家族の支援のひとつに「家族会」があります。今回は、主にハ王子市での認知症の「家族会」についてご紹介したいと思います。

「家族会」とは、認知症の方を介護する家族の方々が集い、介護体験を話し合うことで気持ちが軽くなったり、情報交換ができたり等が期待できると言われています。

認知症の方の家族会の運営は、「認知症の人と家族の会」という全国的な組織から、住まいの身近な地域で、地域包括支援センター（ハ王子市では高齢者あんしん相談センターといいます）が企画する家族会や、介護者であるご家族が自ら立ち上げ、運営する会（以下、自主運営の家族会）等、いくつかの種類があります。高齢者あんしん相談センターがひらく家族会や自主運営の家族会は、1か月に1回位、「例会」と言われる集う会を開くことが多いようです。

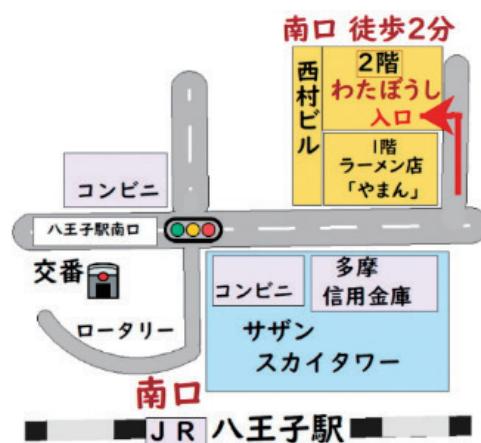
定期的に開かれる家族会の他に、ハ王子市では、2015年2月に常設の認知症カフェ「ケアラーズカフェわたぼうし」が開設され、火曜日から土曜日の10:00～16:00に営業しています。多くの認知症カフェが1か月に1回から数回、開かれている中、常設のカフェは全国的に珍しいと言われています。「わたぼうし」では、認知症の介護や高齢者の生活に関するテーマで講座を開いたり、図書館と連携し、認知症に関連する図書を置いたり、ハ王子市内の家族会や認知症カフェの情報収集をし冊子にまとめたりするなど、認知症や介護についての情報提供を行っています。また、定期的に「介護者の日」を設け、家族会の方が相談対応をしたり、わたぼうしのスタッフが個別にお話を伺ったりしな

認知症疾患医療センターの動き

南多摩医療圏認知症疾患医療センター
センター長代理 植名 貴恵

がら、認知症の人と家族の方々の支援をしています。家族会がそれぞれの会ごとに活動するだけでなく、わたぼうしを核に繋がることができることもハ王子市の特筆すべきことだと思います。

コロナ禍で家族会の多くは、それまでと同じように例会が開けなくなりました。そのような中で自主運営の家族会では、屋外での開催を試みたり、リモート開催をしたり、お電話をしたりしながら介護者のご家族と繋がりつづけてくださっていました。コロナ禍では医療機関も介護保険の施設も、職員だけでなく認知症のご本人や介護されるご家族も多大な苦労、心労を経験しています。自主運営の家族会はいわばボランティアで、コロナによってこれほどまでに苦悩をしなければならないのかと思い、当センターとしても家族会の運営自体の支援をしたいと考え、令和3年度には、当センターの担当する南多摩医療圏（日野市、多摩市、稲城市、町田市、ハ王子市）の自主運営の家族会の代表者の方々とオンラインでミーティングを行う取り組みを始めました。認知症疾患医療センターとして、医療や専門相談の提供のみならず、家族会等と共に活動をしていきたいと思っています。

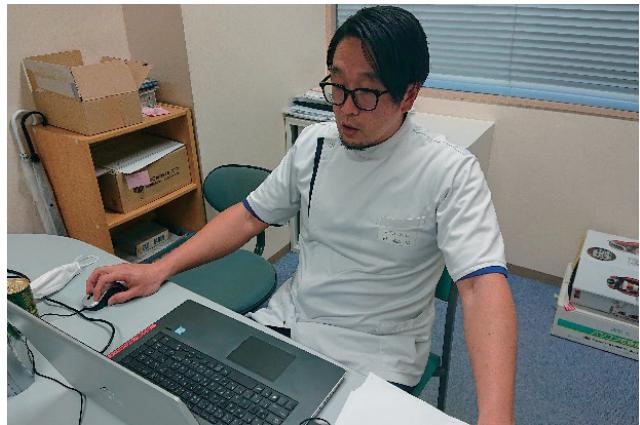


認知症研修会の講師をしました

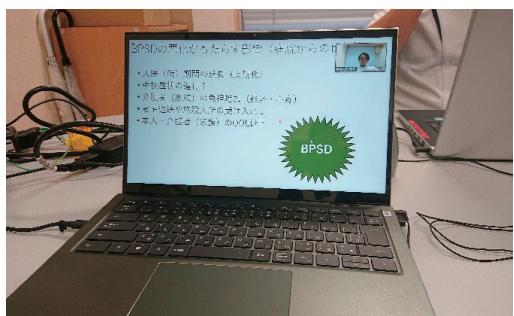
リハビリテーション科 理学療法士 奥出 聰

2022年3月22日に東京都南多摩保険医療圏地域リハビリテーションセンター様よりご依頼を受け、研修会講師をさせて頂きました。認知症のある人へのより良いサポートを目指した関わりをテーマとして、認知症の病態の基本的知識の整理や、行動・心理症状（以下BPSD）が発症する理由と認知症のある人との関わる上で大切なポイントについてオンラインでお話ししました。認知症の家族をお持ちの方、療法士、訪問事業、ケアマネージャーの方々にて参加い

認知症になると、他者の表情から感情を読み取ることが難しくなる一方で、嫌悪と笑顔は比較的、読み取る事ができるといわれています。つまり笑顔で接すると敵意が無い事が伝わり、その他の表情は、上手く読み取れずに嫌悪として伝わっている可能性があるという事です。積極的に笑顔で接する事は相手に安心を与え、心理面の安定を図る為の第一歩となります。また、エイジズムは『年を取っているという理由で高齢者たちを組織的に一つの型にはめて差別する事』と定義されています。このエイジズムの中でも幼児言葉を使うことや、いわゆるタメ口での声掛けなど、一人の大人としての尊厳を欠いた話しかけをエルダースピーカーといいます。このような関わりはBPSDの出現や、悪化に繋がると言われています。信頼関係を築くために親近感を持った声掛けが、実は逆効果になりうるということです。初対面では笑顔や丁寧な言葉選びをしますが、気づかぬうちに忘れている事は多くあります。常に丁寧な声掛けを意識することが大切です。



筆者



認知症を持つ人が穏やかに生活を送れるように、マスクの中でもしっかり笑顔を作り、尊厳を重視した丁寧な言葉遣いを心掛けるという事が、認知症者への対応においても基本となる事をお話ししました。講習会の後半には参加の皆様から多くのご質問を頂き、盛況に終えられたことを大変嬉しく思いました。

令和4年度 新入職者オリエンテーション

当院では、病院教育委員会が主体となり、様々な職員向け研修を実施しています。

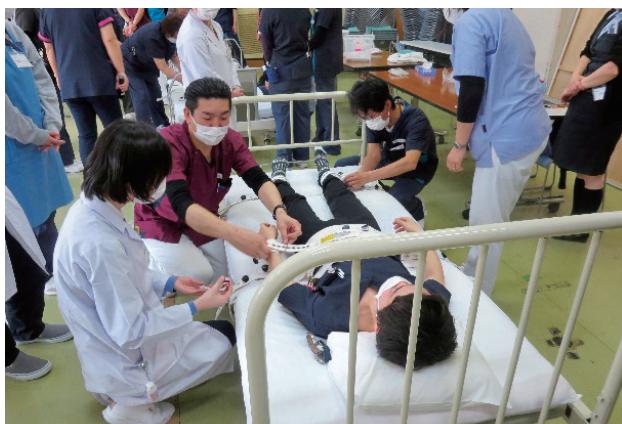
本年度も新しい仲間を迎える、新入職者オリエンテーションを二日間にわたり実施いたしました。開催にあたり実技講習は感染対策を踏まえつつ、委員会ごとに工夫して講義しています。また、感染委員会の講義では、新たにPPEの着脱体験も加わり、より深い学びの場となりました。



院長先生講義



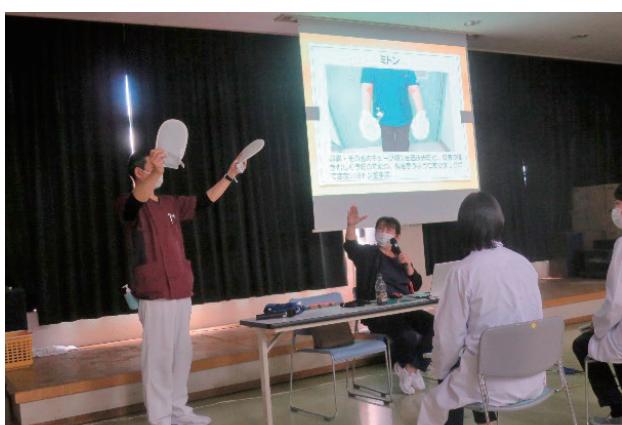
BLSとAED講義



拘束体験



PPE着脱の演習



医療安全とリスクマネージメント



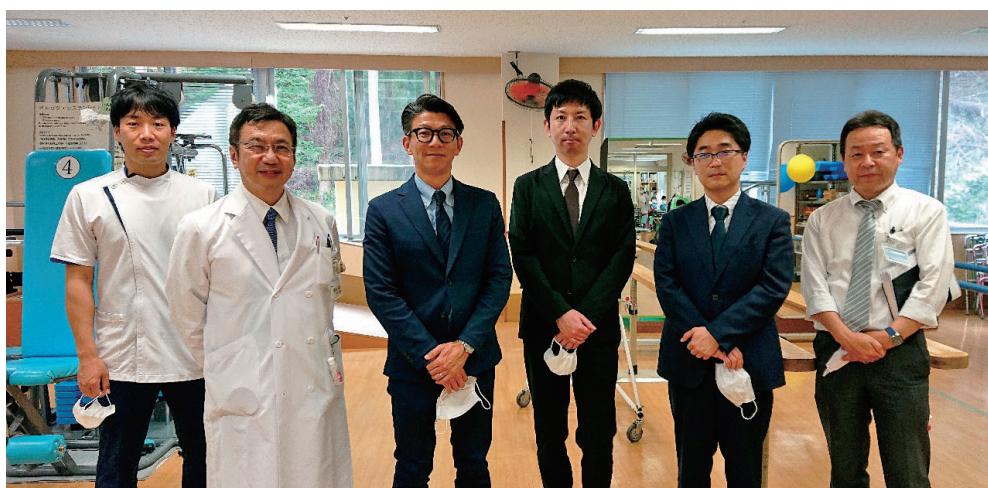
CVPPP講義

薰風会山田病院の副院長 山田幸樹先生が見学に来られました

院長 平川 淳一

山田幸樹先生は、私の前に、東精協の会長をされた山田雄飛先生の息子さんです。この度、日本大学の精神科を退職され、薰風会山田病院の後継者として戻ってこられた先生です。まだ、40代後半と若く、やる気満々を感じ、羨ましく思いました。これから、自分の病院をどうやっていくかと、思案される中、平川病院の身体リハについて興味を持たれ、当院を見学したいとのご希望でしたので、喜んで対応させていただきました。

薰風会山田病院は、西武新宿線の田無駅の踏切の脇にある326床の精神科単科病院です。標榜科目は、精神科、心療内科、内科、歯科と当院と規模も機能も酷似しています。いわゆるスーパー救急病棟を持ち、精神科デイケア、デイ・ナイトケアや、地域支援をする組織もあり、認知症疾患医療センターとして、CTも保有しています。地の利の良さを利用して、今後、益々、発展すると思われる病院です。近々、若院長が誕生し、東京の精神科医療を、高月病院の長瀬幸弘先生と引っ張つていってくれると期待しています。今後も、連携をとって、協力関係を深めていきたいと考えています。



2022年4月13日 当院リハビリテーション室にて
左から3番目より：副院長 山田幸樹様、リワークデイケア室長 高野博樹様、副師長 藤長聰史様

編集後記

寒暖の差が激しく、着る物に困ります。新社会人の皆さんは仕事場に慣れましたか。5月2日は、「八十八夜」立春から数えて88日、「夏も近づく♪♪」という歌の通り農家にとっては、田の苗代作りや畑の種まきの時期、そして新茶の茶摘みのシーズンとなります。お茶は、日本人にとって生活・文化に深く根付き、数々のことわざ・慣用句があります。「お茶を濁す」「お茶の子さいさい」「鬼も十八、番茶も出花」←これはセクハラ?、「猫も茶を飲む」←本当に飲ませるのは×・・・まだまだあるので意味に興味がある方は調べてみて下さい。

医療法人社団光生会 平川病院

東京都八王子市美山町1076
電話 042-651-3131

FAX 042-651-3133

編集 平川病院 広報委員会

ご意見ご感想はこちらへお願いします
kouhou@hhsp1966.jp

**HIRAKAWA
HOSPITAL**

